

2019年3月11日発行

手紙のコミュニケーション価値

宮 田 穰

相模女子大学紀要 VOL.82 (2018年度)

手紙のコミュニケーション価値

宮 田 穰

The value of communication by letter

MIYATA Minoru

Abstract

Modern society is an internet society. The style of communication with a smartphone in one hand is a normal everyday occurrence for every generation. This is easy and convenient communication, users can say what they think briefly and even elementary school children can broadcast their thoughts to anyone at all.

Meanwhile, there are people who are not satisfied with this trend. Even today, they are involved in rich communication by innovating with a traditional communication medium: the letter which they are using to create trusting relationships.

This thesis covers places where letters are still used unchanged today and discusses anew the communication value of the letter which has been finessed as a culture and accepted by countless people regardless of the era. The main purpose is to find a suitable usage style for the letter in the modern day. Discussion was conducted through interviews with two examples of art projects and three examples of correspondence.

In conclusion, it was discovered that the main values of letters in communication that apply to the modern day were the ability of the sender to represent themselves and the potential for a conversation from the heart.

Key Words : Letter, Communication, Analog & Digital, Internet Society, Media Richness

1. テーマ設定とその背景

2017年度の研究ノート「「不利益」から見た手紙のコミュニケーション価値」では、効率性に背を向け、あえて手間暇をかけることによって得られる利益に注目した「不利益」という視点を手がかりにし、手紙をモチーフとした近年の小説や評論、アート作品を事例として採り上げ、考察を進めた。そして、仮説として導き出した手紙のコミュニケーション価値として、①表現の多様性、②時間負荷性、③ストック性を挙げた。これらの価値は、「自分らしさの追究」「思考を重ねること」「形あるものとして蓄積すること」と深く結びついており、時代を超えてコミュニケーションを豊かにしていく秘訣でもあることを指摘した。

そこで、今回はその考察をさらに深めることを意図し、フィールドワークとしてさまざまな手紙の最新現場取材した。そして、関係者の声を裏付けとしつつ、ネット時代の現在だからこそ際立つ手紙の魅力を変えて検討した。

手紙の世界は、アナログの世界である。一方、インターネットが日常化している現代は、デジタルの世界である。つまり、日常的なさまざまなコミュニケーションがデジタル化していく中で、アナログとしての価値がいかに存在価値を示しつつ、代替されずに定着していけるか。さらに、一見古臭く、無駄が多いように見えるアナログの世界に立ち返ることにより、デジタルの世界で見逃されがちな価値を再発見することにはいかにつなげられるか。そのような問題意識が、今回のテーマの背景にはある。

現在手紙は、特別な限られた世界で活用されている。今回の取材を通して、手紙の世界は次の4つのタイプに分類できることがわかった。

1つ目は、コンクール企画型である。これは、自治体のまちづくりや企業の広報活動の中で、定期的な手紙コンクールとして行われているものがあたる。手紙のテーマや形式を定め、広く募集しコンクールを行い、自治体なり企業なりに関心を集めようとするものである。毎年定期的に行われているものもあれば、不定期に行われているものもある。このようなコンクールでは、手紙のもつ心情を掬い上げる表現の多様性や想いを誰かに委ねたいとする魅力が活かされ、企画の継続性につながっている。

2つ目は、アートプロジェクト型である。これは、現代アートの実験として、手紙のもつ表現の多様性や、人と人をつなげる力に着目し、テーマ性のある

コンセプトに基づき参加者を広く募集するものである。このようなプロジェクトでは、コンセプトに応じた参加者を集めることを主とし、コンクールを前提とはしていない。また、実験的な試みとして期間限定で行われるため、いつでも参加できるとは限らない。

3つ目は、文通型である。これは、会員制により特定の相手との継続的な手紙のやりとりを意図したものである。手紙の形式は概ね自由であり、できるだけやりとりに支障が出ないように、ペンネームによる匿名のものもある。従来の手紙を通じた日常的なコミュニケーションを、手紙文化として残すことを意識したものが見受けられる。

そして4つ目は、まちづくり・社会提案型である。これは、アートプロジェクト型と似ている。社会的な目的に基づき広く「声」を募集し、社会で共有することを意図したものである。たとえば、「未来への手紙プロジェクト」では、子どもが生まれたとき、その想いを手紙として記念に残すとともに、ラジオを通して社会に広く紹介し、生まれてきた子どもへの愛情を共有しようとするものである。これは、児童虐待防止への社会的な風潮を高めることを期待している。また、さまざまな素敵なフレーズを全国から募集し、それを街中に貼り出すことで、街というメディアを通して、多様な想いを共有し、文化を尊重する自治体の風土を醸成しようとするものもある。このように、手紙を「ことば」にまで広げて捉えてみれば、他にも多様な事例が見られる。

以上の4つのタイプを眺めてみると、誰かが企画を立て、参加者を募るものばかりである。文通型を除けば、現在の手紙利用の多くは、イベント企画として特別な機会の中で行われている。いずれにしても、現在の手紙利用は、従来のように日常的なパーソナル・コミュニケーションとして自発的にやりとりされていたものとは異なり、多くが特別なものとなっているのである。

なお、今回のテーマに関する先行研究について簡単に触れておくと、「手紙」と「コミュニケーション」を結びつけた研究は、日本ではほとんどない。その中で、『手紙アナトミア』(大江、2008)が唯一まとまった論考となっている。手紙のコミュニケーション価値について、ネットメールと比較しながら、定量的なデータ分析をもとに、考察が行われている。

その主な結果として、ネットメールと手紙は次元が全く異なり、パートナーの関係にはないことや、手紙は現代のコミュニケーションの中で特別なもので

あり、非日常で使われるものへと、時代とともに変わってきていることを論証している。このような知見は、今回のテーマを研究する上で、大変参考になった。

では、現代ならではの手紙のコミュニケーション価値を、以上のような取材結果を手がかりとしながら、詳細に見ていきたい。

2. 研究方法と仮説

今回の研究では、取材した事例を定性的に扱い、そこから価値を見出していく。対象とする事例は、上述したタイプの中では、アートプロジェクト型と文通型に限定したい。なぜなら、コンクール企画型はテーマ設定や形式が内容をかなり限定するからである。また、まちづくり・社会提案型は形式が通常の手紙と、かなり離れているからである。

なお、今回対象とする手紙のスタイルは、原則として封書とハガキとし、書き手が存在すればよいとする。必ずしも、受け手の存在を前提としない。

そして、今回の研究仮説は昨年度の研究ノートを踏まえ、次のように考えている。

それは、手紙には送り手らしさを「分身化」する力があり、「心の会話」を可能とする。ただし、それを支える前提として、手間暇をかけコミュニケーションを楽しむ「手紙時間」が不可欠である。

つまり、手紙は手間暇をかけることで、その場にはいない相手との間に、その人らしさを失わない「分身」同士の「心の会話」ができる場を生み出すことを可能とするメディアだと言い換えることができる。

では次に、アートプロジェクト型と文通型での事例検討に入っていこう。

3. 事例検討

今回取材した事例から、以下の5つの事例を採り上げる。アートプロジェクト型では「水曜日郵便局」「漂流郵便局」、そして文通型では「文通村」「青少年ペンフレンドクラブ（以降、PFC）」「日本絵手紙協会友の会（以降、友の会）」である。

検討する視点としては、事例の特徴を押さえた上で、そこで行われているコミュニケーションの意味を捉えたい。そして、一般的なコミュニケーション価値とのつながりを検討する。

3.1. 水曜日郵便局

アートプロジェクトとして行われているこの取り組みは、水曜日に感じた日常的な想いを手紙にしたため、水曜日郵便局へ送る。すると、別の「誰かの水曜日の日常」が手紙として送られてくるものである。交換する相手は、自分で選ぶことはできない。水曜日郵便局の事務局が内容を確認の上、ランダムにマッチングさせ、交換させていくものである。もちろん、この郵便局は日本郵便とは無関係であり、民間団体により非営利で行われている。

その特徴をみていくと、まず知らない相手に自分の日常を聴いてもらうことであり、その多くが初対面の相手となる点に注目できる。

主催者によれば、水曜日は週の半ばにあり、「当たり前前の日常」の象徴である。それを誰かと交換することで、当たり前前の日常が社会の中で今も変わらずに存在していることを実感し、お互いの安心につながるという。水曜日郵便局宛に投函する人は、特別な出来事や誰かのドラマティックな話題を期待しているわけではない。当たり前前の日常が今日も滞りなく訪れてきたことを喜び、自分の知らない誰かにも同様な日常が訪れていることに安心するわけである。このような意識の背景には、2011年に起きた東日本大震災後に顕著にみられるように、当たり前前の日常のありがたみを再評価しようとするメンタリティが作用している。投函する人たちは、社会がドラマティックに変わっていくことや、誰かがヒーローになることを求めているのではなく、水曜日に手紙を書くことが平穏な日常を定点観測する機会となり、同時に当たり前前の日常の中にも多くの喜びがあることを、お互いに気づく仕掛けとなっている。

さらに、交換される手紙の内容は、手書きにより綴られるさりげない日常のひとコマだけでなく、知らない相手からの手紙を読んでもくれたことへの感謝の言葉が多く綴られているという。もちろん、誰もが初対面の相手を想定し書く手紙であり、内容も主催者が目を通すことを前提としているので、善意に基づく手紙が多くなることは当然といえるだろう。しかし、善意に基づく手紙の交換が、定期的に行われる機会になっていることは、確かな事実である。なお、利用者数はリピーターも含めると、熊本県津奈木町で取り組まれた3年間では、1万通余りにのぼる。現在は、岩手県東松島市鮫が浦に移転し、2017年から再スタートしているが、半年で5000件を超えているという。このことは、年間数千件程度の安定した利用者が見込める取り組みとなっているこ

とを示している。

では、この取り組みに見られる手紙によるコミュニケーションの意味について考えてみたい。

この取り組みで送られ、届けられる手紙は、綴られている情報を知らない受け手に知らせるというよりも、送り手の日々の心情をエピソードなどに託して受け手に伝えることにより、共感を醸成しやすいメディアになっていると考えることができる。

さらに、主催者によると、投稿者を支えているメンタリティには「孤独の肯定」があるという。誰もが何がしかの孤独を感じる日常の中で、知らない他者の孤独を知ることによって自分との共通点を見出し、同様な想いを抱く相手がいることが、安心につながるからである。いずれにしても、水曜日郵便局は、毎週やり取りされる手紙が知らない者同士の心の安定に働きかけるメディアとして機能していることが、わかりやすく示されている。また、このような「善意の手紙」を毎週定期的に交換する試みは、ネット上では善意より悪意に満ちた情報が目立つ日常において、善意に基づく「心のインフラ」を社会の中に少しずつ築き、広げていくことにもつながっている。ちょうど、マスコミを通して届けられる深刻なニュースが溢れている日常の中で、ほっとするニュースがときたま流れることに似ている。いずれにしても、このアートプロジェクトは、損得を超えた日常的な心情の交流を、さりげなく生み出す仕掛けになっている。

そして、コミュニケーション価値とのつながりを考えると、次の点が指摘できる。

1つは、知らない誰かと「当たり前の日常」を交換することで、心の交流ができる点である。相手が知らない誰かであることは、かえって利害関係に縛られることなく、リアリティのある心情を素直に投げかけ合うことにつながる。なお、現在交換される手紙は原紙となっており、1点モノになる。つまり、この特別な手紙の存在は、交換する相手のリアリティをさらに高めることにもなっている。

もう1つは、手紙の交換が「善意」のコミュニケーションの循環となる点である。感情は良いものも悪いものも伝染する。現在、一般的にネットでは、悪意の流通が目立つ状況にあるが、水曜日郵便局は社会に善意を循環させ、広げていく貴重な装置となっているといえる。

つまり、この取り組みは、不特定の人たちの心の交流を促すとともに、善意を社会に広げるコミュニケーションとしての価値が認められる。

3.2. 漂流郵便局

もう1つのアートプロジェクトである漂流郵便局は、瀬戸内海に浮かぶ小島、粟島に設けられた私設の私書箱であり、届けられた手紙は誰でも読めるギャラリーが設置されている。毎月2回、第2、4土曜日の午後のみ開局している。この取り組みがスタートしたのは2013年であり、丸5年が経過している。

全国から5年間で3万通余りの手紙が寄せられているが、投函者はホームページやマスメディアでの紹介などから存在を知り、参加している。単に投函するだけではなく、届けられた手紙を見ようと、全国から訪れる人も少なくない。

この取り組みの特徴は、書き手はいるが受け手が現在存在していない点である。つまり、書き手は誰かを想定し、返事の期待できない手紙を書き綴ることになる。その相手は、すでに故人となった親しい家族、昔の友人、いじめられた相手、過去の自分、愛着のあったモノなど、実にさまざまである。

では、なぜ、現在受け手のいない相手に向けて手紙を送るのか。この問いが、手紙によるコミュニケーションの意味を示唆してくれる。

現局長へ行ったインタビューによると、次のような局長の言葉がヒントになる。

「手紙の内容にはいろいろあるが、人生悲喜こもごも。良いことも悪いこともいろいろある。騙された相手に恨み言を書いてあるものもあるし、昔のいじめに関してのものもある。」

「人は文章を書くことで気持ちが整理され、スッキリする。癒されることもある。そして、お礼状をたくさんいただくこともある。それだけ、ここは影響力があるのだろう。」

以上からわかることは、まず書くことは自分の心を整理し、癒すことにつながる。つまり、カタルシス（浄化）になる行為である。綴られる内容は、亡くなった方への感謝ばかりでなく、恨み言や、過去の自分への後悔などさまざまである。相手が現在いないことは、かえって正直に自分の心のうちを吐き出すことを可能にする。また、日記に留めるように自分の中だけで押しとどめておくのではなく、信頼できる誰かに受け取ってもらえることにより、ずっと心の中で重荷になっていたものを、ようやく下すことにつながると考えられる。だから、局長へは手紙だけでなく、礼状がたくさん届くことにもなる。さらに、局長は届けられた多くの手紙をみていて、「手書きの暖かさ」をととても感じるという。とくに、

子どもからの手紙は、何度も読み返したくなる味わいがある。つまり、相手のことを思いながら、時間をかけて自分の手で心の中を少しずつ吐き出させる器として、手紙はふさわしいメディアだといえる。それゆえ、心情をあまり損なうことなく表現できることにつながり、手紙そのものにも暖かさをはじめ、情感がしっかりと移転されることになる。

以上をふまえ、コミュニケーション価値とのつながりを考えてみよう。

まず、手紙は自分の手で丁寧に綴ることにより、心の中を多様に表現できるだけでなく、スッキリと思いを吐き出させることにもなり、それはカタルシスにつながる。このことは、必ずしも現在相手が存在していなくても、手紙を書くことの意味を見出すことにもつながる。それは、誰かを想定した自分との対話ともいえる。ただ、書くだけではなく、それを信頼できる誰かに届けることによって、心の浄化は完成する。それは、牧師への告解に似ており、他者へのカミングアウトともいえる。

さらに、手紙という心情が移転されるメディアが、形あるものとして着実に保管されていくことも、コミュニケーションの価値となる。たとえ、一方向的な手紙であっても、書き手の情報が詰まり、その人らしさが滲み出た手紙は、その時々々の生活記録としての価値が生まれる。その意味から、さまざまな手紙がアーカイブされ展示されている漂流郵便局は、現代の生活記録の資料館にもなりうる。

以上をまとめると、この取り組みは、手紙を活用したカタルシスを生む仕掛けである。また、同時に生み出された手紙は、社会にとって心情が豊富に盛り込まれた生々しい生活記録としての価値が認められる。手紙は、必ずしも双方向のやりとりがなされなくても、書き手自身の内面での対話によるコミュニケーション価値を見出すことができる。

3.3. 文通村

ここからは、文通型に目を移していく。

まず、文通村の特徴から述べていこう。文通村は2009年にスタートした文通事業をビジネスとする民間企業である。この事業は会員制で行われ、個人情報保護に配慮し、ペンネームと架空の住所をもとに、事務局が仲介することで文通が行われている。

10年間で、現在1000名を超える会員がいる。その約9割が女性会員で占められており、30、40代を中心に世代を超えて利用者が広がっている。

文通の仕組みは、会報や文通村サイトで会員のプ

ロフィールを確認し、関心のある相手に手紙を送る。ペースは、月に2回で、会員ごとに届いた手紙がまとめて文通村から送られてくる。長い手紙もあれば、簡単なハガキもある。気に入れば、会員自身の判断で文通を続けていくことになる。

文通村社長へのインタビューによると、会員属性について次のように述べている。

「インスタが好きな女性は「盛る」ことに抵抗が少なく、自己顕示欲が満たされているだろう。でも、それがあまり好きではない女性にとって、自分を表現する場があまりないように思う。そのような人たちが、深い関わりをどこかで求めているのではないか。」

「手紙は誰かが自分に興味を持ってくれる第一の方法であり、自分もまた相手に対し興味を持つことになる。それは、人間本来がもつ「つながりの心地よさ」なのではないか。」

つまり、SNSなどネットでは満足できない人たちが、文通を通して深く心地よいつながりを求めているといえる。

そして、その魅力を次のように述べている。

「手紙は「時間を楽しめる」ものになっている。現在は、時間をいかに節約するかが行動基準になり多くの人が動いているが、手紙はそれとは別の時間になっているのではないか。このことは、手紙に限らず、たとえば親しい人と会って過ごす時間の楽しさと同じだと思う。」

「手紙には適度な「距離感」があるのではないか。今の時代だからこそ、それが適度なのではないかと思う。現在は、距離感を詰めようと思えば詰められる時代だから、手紙のような時間は意味があると思う。ネットの場合（リアルタイムで十分考えないまま、やり取りしがちなため）誤解したまま反応し、関係が悪くなったり、炎上したりする場合もある。」

以上を踏まえながら、文通によるコミュニケーションの意味を整理してみよう。

文通には、信用できる相手が見つければ、手紙を通した深い関わりを築くことが期待できる。その深さは、自分のことを丁寧に伝えつつ、相手のことを想像し理解する、相互理解の深さである。また、やり取りを通して刺激し合い、お互いが変わっていく関係の深さでもある。

さらに、その相手とのコミュニケーションにかかる時間を楽しめることや、月2回のペースが相手との心地よい距離感につながることで、コミュニケーションの魅力となっている。

このようなコミュニケーションは、まさにネットでのそれと対極にある。短時間での手軽なやり取りを通してつながっているネットでのコミュニケーションは、時間をかけることはマイナスでしかない。TwitterにしてもLINEにしても、しばらく目を離していると取り残されてしまう。そして、少しずつ他との距離が離れていってしまう。つまり、時間だけをみても、手紙でのコミュニケーションは、ネットのそれとは次元が異なっている。そして、十分時間をかけることによって適度な距離感が生まれ、それが深い信頼関係につながっていくといえる。

また、文通村社長は「文通を通して、基本的に善意でつながる関係を作りたい」と述べている。それは、文通は贈り物だとする次の考えに基づいている。

「紙ならではの良さについては、「手軽でない」ことに価値がある。手書きで手間暇がかかるからこそ、受け取ったときに、(届けるまでに手間暇をかけてくれた)相手の様子がわかる。だから、手紙は相手からのプレゼントとして届くのだと思う。」

最後に、文通のコミュニケーション価値とのつながりをまとめよう。

文通は、手間暇をかけて手紙をやりとりすることにより、ゆったりとした楽しい時間を味わいつつ、相手と適度な距離感と信頼関係を築くコミュニケーションだといえる。そして、このようなコミュニケーションは、贈り物の交換でもあり、善意でつながる関係でもある。ここでも、水曜日郵便局と同様に、「善意の関係」が強調されている点は興味深い。

3.4. 青少年ペンフレンドクラブ (PFC)

PFCの前身は「郵便友の会」であり、その始まりは古い。「郵便友の会」は、昭和24(1949)年に誕生した。その会員数は、昭和30年代(1955~64年)が最盛期であり、約30万人で推移していた。その後、同会は平成13(2001)年にPFC(青少年ペンフレンドクラブ)と改称された。

会員数は減少の一途をたどり、平成19(2007)年には約6000人にまで会員数が減少した。また、郵政民営化がスタートした2007年の翌年、同会は一旦解散した。そして、中高生のクラブ活動に頼っていた会員を、個人参加とするなど規約の改訂を行って再スタートさせたところ、じわじわと会員数が増加に転じてきた。平成27(2015)年には約13,527人とピークになった。2018年現在は、11,000人余りで安定した会員数となっている。

現在の会員数は、昭和30年代に比べればかなり少

ない数にみえるものの、ネット時代においても10,000人を超える規模は、文通組織の中では最大である。

日本郵便によると、会員属性は20代以下が36%であり、女性は80%程度だという。会の名称と実態にズレを感じるものの、会員傾向としては文通村と傾向が似ている。つまり、文通は30代以上の女性が主に担っている活動であることがわかる。

PFCの場合、会報で会員のプロフィールを紹介し、それをもとに文通相手を見つけ、実名で直接やり取りするスタイルになっている。そのため、文通だけでなく会員同士が直接会う場合もあるという。

文通でのコミュニケーションにおいて、女性が主体になっている意味を尋ねたところ、PFCへの取材では次のようなコメントが得られている。

「女性が多い理由は、もともとコミュニケーションに馴染む傾向が男性に比べて強いことや、いろいろ手紙やハガキに工夫を凝らすことを楽しみ、少人数で一緒に楽しむことに喜びを見出しやすい傾向があることによるのではないか。」

また、工夫を凝らす方向としては、「人間味や温もりが感じられること。「手書き」が相手へ思いや気持ちを伝えるなど、さまざまな表現の工夫ができる。「手紙は心の贈り物」「切手は小さな贈り物」ともいえる。」

そして、「相手の気持ちのこもった手紙は、捨てられず保管される。何度も見返したり、読み返したりする良さもある。」

まさに、漂流郵便局の局長の言葉を思い起こさせる。このように、心情を手作りの手紙に託して、まるで贈り物のように交換し合うコミュニケーションは、女性的というより、手間暇をかけることやゆったりとした時間を楽しめるコミュニケーションであり、手紙ならではの世界である。そして、すでに紹介したアートプロジェクトや文通村とも、コミュニケーションの意味として共通する点でもある。

では、コミュニケーション価値とのつながりはどうだろうか。

PFCと文通村を比較すると、ここ10年に限定してみた限りでは、違いは規模とやり取りする回数、そして運営の仕方ぐらいしか見あたらない。つまり、ネット社会でも、最低1万人以上の文通ニーズが見込めるだけでなく、文通村と同様な価値を提供できているといえる。

とくに、手書きによる手作りのコミュニケーション価値は、日常的なデジタルでのコミュニケーション

ンとの使い分けを意識し伝えていくことで、より際立つものとして受け止められると考えられる。

3.5. 日本絵手紙協会友の会

最期の事例として、特徴的な文通の取り組みである「絵手紙」での文通について紹介しよう。

日本絵手紙協会（以下、協会）がスタートしたのは、1985年と今から30年以上も遡る。同年には、その文通を行う組織として、友の会もスタートしている。

協会によると、現在の会員は「月刊絵手紙」の購読者とし、1万2～3千人程度となっている。そのうち、2割程度が友の会に参加している。最近では、購読者が少しずつ減少しているため、友の会も減少傾向にあり2,500人ほどだが、2割程度という比率はあまり変わっていない。

友の会の会員属性は、9割程度を女性が占め、60、70代が中心となっている。文通村やPFCと比べれば、中心となる世代はシニア層とかなり高い。

また、文通だけではなく、毎年全国大会がイベントとして開催され、1000人以上の会員が全国から集まってくる。文通だけでなくリアルに出会う場もあることは、会員同士の絆を強める仕掛けとなっていることがわかる。

友の会の文通のしくみは、次のように独特である。入会のタイミングは年に1度あり、その年の名簿が届けられる。その名簿には、実名、住所、生年月日、自己紹介など個人情報が記されており、その名簿をもとに、直接文通を行うスタイルである。文通村のように事務局が間に入るわけではない。

入会時には、まず20人ごとの組に分けられる。そして、会員は自分の組の全員に自己紹介することから、文通に慣れていく。その後は、名簿をもとに相手を選択し、自由にやり取りする。このような仕組みは、入会后誰からも絵手紙が来ないことがないよう配慮された試行錯誤の結果だという。また、入会したときに割り当てられた組（20人）の連帯感が生まれやすいといった効果もある。さらに、その交流が発展し、そのメンバーを中心に絵手紙以外の新しい会が生まれる場合もある。

協会によると、絵手紙のやり取りは原則として毎日1通は書くことになっているという。他の文通の仕組みと比べると、かなり頻繁である。絵日記を毎日書くイメージに近い。そのため、よほど時間の余裕がないと続けられないと考えられ、会員が女性のシニア層に多い理由の1つがわかる。

絵手紙の定義は、はっきりしていない。文面の要素としては、「絵、書、ことば」だが、心が込められた手作りのものであれば、1つの要素だけでも良いそうだ。

現在の絵手紙による文通のコミュニケーションの意味を考えると、主に女性のシニア層の趣味の1つとして、絵手紙が手作りされる。それを会員同士の間で毎日やり取りすることで、お互い気遣い、また刺激し合い、日々の活力を与え合っていることがわかる。

日本絵手紙協会の創始者である小池邦夫氏は、「一生の友を探し出してください」というフレーズで、絵手紙をする意味を表現している。シニア層になり友人が少しずつ減っていくことも、絵手紙が必要とされている背景にあると考えられる。

以上を踏まえると、絵手紙による文通のコミュニケーションの意味は、趣味と支え合いの両立だといえる。そして、日々お互い送り手らしい絵手紙を書き、また受け取る楽しみを通して、手応えのある形で信頼関係が実感できる。友の会の会員にとって、単なる趣味にとどまらず、日常的な深い関係づくりのツールとして、絵手紙が求められていることが改めてわかる。

絵手紙の場合は、通常の手紙やハガキと比べると、手作りに対する拘りや送り手らしさがより鮮明に表現される。また、言葉より絵が中心になることが多いため、さまざまな相手に伝わりやすい手紙にもなる。たとえば、以前からイタリアで日本語を学んでいる人たちと絵手紙交流が続けられている。現在は、ブラジルの日系人との間でも絵手紙交流が行われており、絵手紙を通じた交際交流の広がりがみられる。

絵手紙での文通が、どのようなコミュニケーション価値につながっているかを考えると、次のことがいえる。

まず、手作りによる表現への拘りが、その人らしさを際立たせ、加えて頻繁にやり取りすることで、深い絆が形成されていることである。それは、絵手紙を超えて、全国大会での直接的な出会いにより、さらに強められる。

もう1つは、習熟が求められるコミュニケーションであることだ。これは趣味を極めることでもあるが、絵手紙を習慣化しトレーニングを重ねることで、コミュニケーション力は磨かれていく。絵手紙は、コミュニケーションの心と技を極めていくスタイルの1つである。このことは、通常の手紙やハガキでもいえることだが、習慣化は手紙の日常的な利用を

文化にまで高めていく必須要件であることも示唆している。

さらに、コミュニケーションを形として残していく傾向も、絵手紙の場合はさらに高まるといえる。言い方を変えれば、やり取りがお互いの作品集として蓄積されていくのである。

絵手紙による文通は、文通によるコミュニケーションの価値である「手作り感」や「心を込めた表現」、そして「信頼関係の蓄積」を、よりシンプルに強調した形で示していると考えられる。

4. 考察

それでは、以上の事例を踏まえ分析を行っていく。

分析の流れとしては、まず「手紙ならではのコミュニケーションの魅力」を整理する。そして、その魅力によるコミュニケーションの意味を考察する。さらに、コミュニケーションの価値として、どのように集約できるかを追究したいと考えている。

まず「手紙ならではのコミュニケーションの魅力」については、いくつかの方向に分かれるため、表現、関係、その他と、3つに分けて考察を進めていく。

最初に、表現についてみていくと、今回広く取材した事例では、手紙といってもさまざまなスタイルがある。文通の世界では当然、字数は自由である。一方、「絵・ことば・書」を基本要素とした絵手紙の世界では、絵筆を用いた絵が表現の主要なものであったり、キャッチコピーのような簡潔なフレーズであったりとシンプルさが魅力になっており、俳句のような余韻も残している。

さらに、文字そのものに注目すると、多くの取材先では「手書き」の魅力が語られていた。それは、手書きのもつ情報量や質と、活字によるそれとは、格段の違いがあるからである。アナログとデジタルの情報の質の違いともいえる。手書きは得手、不得手はあるものの表現の幅は人それぞれである。筆跡鑑定で書き手の特定がなされることを考えれば、手書きは書き手の特徴を写し取っている。つまり、手書きによる文面は、書き手の「分身」に他ならない。そのことは、子どもの手紙を手書きのまま表したものと、活字にしたものの違いを比べればよくわかる。

また、手紙の表現性を支えるものとしては、他にさまざまなツールがある。筆記具や便箋、ハガキ、封筒には、受け取る相手のイメージに合わせ、多様な選択肢があり、多様な意味を込めることができる。

また、切手や風景印により、季節や土地柄などの特別感を演出することもできる。ちなみに、平安時代にはまだ封筒がなく、宮中の公家たちは折枝に書を巻きつけて、恋文などを相手に届けたという。そのとき、折枝に咲く花の種類やその咲き具合が、お互いに通じるサインになっていた。それくらい文面以外でも、手紙による表現の幅の広さが認められる。

いずれにしても、規格化されたネットでのメールやSNSでのやり取りのイメージと比較したとき、手紙の表現性の豊かさには限りがないことが改めてわかる。

さらに、表現する行為そのものにも、大きな意味が隠されている。今回の取材の中では、漂流郵便局に届けられる多くのハガキは、すでに亡くなった人、過去にお世話になった人など、受け手本人が現在いないハガキを書くことを前提としている。そのようなハガキをなぜ、5年間で約3万通といった少なくない人々が書き、漂流郵便局に届けられてきたかを考えると、人は心の奥底に溜まっていることを吐き出すように書くことで気持ちが整理され解放されるといった、カタルシス（浄化）につながるからだと考えられる。つまり、手紙を書くことは自分との対話であり、それを通して心を開放するプロセスだともいえる。

次に、関係についてみていこう。

手紙のやりとりをイメージしたとき、手紙を通して相手の分身を感じ、相手への想像力が喚起される。しかし、その場に相手がいるわけではないため、相手の表情や立ち居振る舞いなど、いわゆる非言語コミュニケーションにあたる相手の情報はかなり制約される。

つまり、手紙が相手の分身として立ち現れ、それを通して伝えられるメッセージが純化され受け手に伝わる。「手紙は心の会話」と言われることがあるが、文面を中心とした手紙全体が相手の心を写し取ったものとして届けられ、やり取りがなされている。匿名による文通が、文通村では行われているが、会ったことも声を聴いたことすらない相手を、手紙からイメージできるものすべてを駆使し理解しようとする。そこには見えない相手への配慮と、見えないが故に純粋なメッセージのやりとりが認められる。

手紙により築かれる関係は、信頼を前提とした善意に満ちたものになる場合が多く認められる。たとえば、「水曜日郵便局」の取り組みでは、常に初対面の相手を想定し手紙が届けられるためか、文面には手紙を受け取ってくれたことへの感謝や相手の幸

せを祈る優しい言葉が多く綴られている。

文通の世界に見られる手紙により築かれる関係性は、一言でいえば信頼性である。それは、心を込めて自分のことを正直に語ることで支えられている場合が多い。水曜日郵便局の取り組みを検討するシンポジウムでは、赤崎郵便局長から直接出会うことがない相手との間に「心のインフラ」が築かれているという象徴的な言葉があった。

一方、ネットの場合では、匿名ゆえに相手を攻撃したり貶めたりするコメントがなされることが珍しくない。この関係性の違いはどこにあるのだろうか。

手紙は自分の分身であることが相手に伝わることを前提にした上で、相手のイメージを意識し、文面を丁寧に考え、表現を凝らすところに手間暇がかけられる。そのような長い過程を通して関係を築こうとする点が、ネットの場合とは最も異なる点である。たとえばSNSでコメントをする場合に、限られた情報を自分本位に解釈し、主に感情にまかせて反応することがよくみられる。そこには、相手を理解しようとする姿勢や、熟考して言葉を選ぶような時間も余裕もない。それゆえ、瞬間的に感情を爆発させることで、自己満足するようなコミュニケーションになりがちである。おそらく、以上のようなことが大きく影響していると考えられる。

手紙のように手間暇をかけ、相手のことを冷静に理解し、メッセージがしっかりと伝わるような文面を練り上げる時間は、信頼を築く方向に向けられるからこそ、大変な作業であってもやり切れるものである。しかしながら、付和雷同的に相手を攻撃したり貶めたりする方向には向かうためには、エネルギーがかかりすぎる。手間暇がかかることは、手紙がマイナス方向に向かいづらくするための、いわば壁になっていると考えられる。「心のインフラ」を築くためには、手間暇がかかるともいえるだろう。ネット上での炎上や「祭り」をよく観察してみると、手軽さゆえに燃え広がっている様子がよく認められる。

最期に、その他の魅力についてもみていきたい。手紙は信頼構築の証として活用されることが多いだけに、その証は捨てられず大切に保管される場合が多い。相手が手間暇をかけ、自分に対して「1点もの」として手作りしてくれたものであることがわかると、それは単なるメッセージを運ぶメディアを超えて、「贈り物」としての性格を十分兼ね備えることになるからである。また、保管されたものは、何度も読み返されることが少なくない。

つまり、手紙を手作りの贈り物だと捉えたとき、そこから生まれる関係は「贈与」「互惠」に基づく関係となり、信頼性を高めることにもつながりやすい。一方、ネット上でのSNSによるコメントは、記録としてネットの中にとどまり続けるだけであり、「誕生日メッセージ」であったとしても、贈り物にはなりえない。あくまで、断片的なメッセージのやりとりの記録でしかない。そして、いったん消されてしまえばそれまでである。

このように考えてみると、普段はネットで手軽なコミュニケーションを行いながら、誕生日など特別なときには、あえて手紙を贈るような使い分けが、これからも信頼関係を継続させるためには必要になってくると考えられる。その意味でも、手紙のもつ贈り物としての特別感や、それゆえ保管される特徴は時代を超えて変わらない魅力である。

さらに、手紙には手間暇がかかる。要は、十分な時間が前提として必要なメディアである。ただ、この時間は節約したり、効率化したりするための時間ではない。あえて手間暇をかけ、相手の顔を思い浮かべ、ゆっくりと深く考えることを楽しむ時間である。

また、このような「手紙時間」は書くことにかける時間だけではない。相手からの手紙をゆっくりと味わいながら読む時間も必要である。他にも、手間暇をかけて書いた手紙を推敲の上完成させ、ようやく投函するときまでにかかる時間があり、さらに手紙が相手に届けられるまでの翌日から数日間の時間がある。ゆっくり時間をかけて届けられることは、待つ時間が存在することでもある。待つ時間は、手紙が届けられるまでを楽しむ時間でもある。つまり、手紙には時間を楽しむ機会がいろいろ存在する。この点は、リアルタイムでのやり取りが多いネットと対照的である。心を込めて考え抜いた手紙が、文通ではゆっくりとした時間をかけながらやり取りされる。ひと月に一度しかやり取りされない文通は珍しくない。しかしそれは、息つく暇もなく、断片的な言葉がやり取りされるSNSでは、決して味わえない時間の楽しみ方に他ならない。

以上述べてきたことを踏まえ、改めて手紙のコミュニケーション価値とのつながりについて、考察をまとめていきたい。

コミュニケーション価値とは、単なるそのメディアの機能や特性ではなく、そのメディアを通したコミュニケーションを行うことによって、双方にどのような変化が生まれることが期待できるかだと考え

ている。つまり、手紙によってもたらされる、手紙ならではの影響力と言い換えてもよいだろう。

まず、手紙は「分身力」をもたらしすることができる。手紙には、多様な表現性が備わっていることにより、相手をイメージし、自分らしさを表現することができる。このことは、相手の目の前にいなくても、手紙を通して自分の「分身」が存在していると感じさせることができる。

たとえば、既に亡き父親からの直筆の手紙を繰り返し読み返すことで、父親の存在を常に身近に感じることが難しくないだろう。そのように、場所を越え、時間を超えて、親しい相手の存在や心情などを、身近に想起させることが手紙により可能となる。

直接、面と向かって対話する場合との違いを考えると、手紙によりもたらされる相手からの情報は限られるが、より純化された心情や本音を感じたり、自分が対話したいときに冷静に対話したりできる。つまり、手紙がもたらす情報量や質は、送り手次第ではあるが、送り手らしさを感じさせる程度にまとまりがある。そして、対面したときの非言語コミュニケーションによる余計な情報が省かれている分、送り手の伝えたいことがより浮かび上がってくる。また、時間をかけて冷静にゆっくりと向き合えることで、相手を深く理解することにつながるというだろう。

次に注目できる点は、手紙は「カタルシス（心の浄化）」を生むことができることである。手紙を丁寧に、時間をかけて書くプロセスは、相手のことをイメージし、自分と対話しながら適切な言葉を選び、試行錯誤しながら納得する時間に他ならない。自分の心の奥底をのぞきながら、さまざまな想いに改めて気づき、その整理をすることでもある。そのような行為が、心を少しずつ浄化させ、背負い続けてきたストレスを軽くさせることにつながっていく。このことは、自分にとっての価値であり、瞑想や座禅に近いと考えられる。

ただ、手紙の場合は、誰かに受け取ってもらうことによって、自分の心を相手とシェアすることになる。漂流郵便局のように、届けたい相手が現実的にはいなくても、信頼できる誰かが受け取ってくれるだけでも、心の負担を軽減することにつながると考えられる。このような誰かへ移管または贈与できる仕掛けが用意されていることが、手紙を通してカタルシスを感じるためには必要である。それは、手紙は現在受け取る相手がいなくても、関係性の中に存在していると考えられるからだ。

さらに、手紙は「心の会話」を可能にする。相手に向けて、心情をわかりやすく表現し、それを中心に対話が続いていく。また、文通のような手紙は善意に基づいているため、相手の実名やすべてを知らなくても、やり取りを踏まえた相手のイメージを手がかりに、会話を継続していくことが可能である。このことは、手紙が心情に重きが置かれ、その人の余計な多くの情報を省くことによって、純化された心の会話を可能とし、信頼関係が築かれやすくなると考えている。

水曜日郵便局の取り組みが、社会における善意に基づく「心のインフラ」をつくることにつながっているとすれば、どのような形で手紙の利用を促進することは、「心のインフラ」づくりに寄与できることが期待できる。

友の会の会員は、毎日1通は絵手紙を出すことを心がけているそうだが、絵手紙を通して「一生の友を見つける」ことを目指している。シニアになり、昔からの友人が少なくなる中で、絵手紙を通じて友を求めるコミュニケーションは、「心の会話」があればこそ可能になると考えられる。

5. 結論

では結論として、仮説の検証を行うとともに、さらに発展的な視点にも言及したい。

まず、最初に設定した仮説は以下のとおりである。

それは、手紙には送り手らしさを「分身化」する力があり、「心の会話」を可能とする。ただし、それを支える前提として、手間暇をかけコミュニケーションを楽しむ「手紙時間」が不可欠である。

つまり、手紙は手間暇をかけることで、その場にはいない相手との間に、その人らしさを失わない「分身」同士の「心の会話」ができる場を生み出すことを可能とするメディアだと言い換えることができる。

紹介したいくつかの事例からわかることは、手紙は決して手軽なメディアではないことである。しかし、自分なりにさまざまな工夫を凝らすことができ、相手のことを思い浮かべながら手紙を綴ることは、決して苦痛ではない。自分のペースで考えること、相手に最も伝わるように表現を工夫することを鍛える機会にもなる。そして、何よりも相手がとても喜んでくれるコミュニケーションである。さらに、手紙だと自分の言いたいことが伝わりやすく、気持ちまで受け止めてもらえるメディアだといえる。

手紙が、このように心情までうまく掬い上げられ

るメディアであることが、いくつかのアートプロジェクト企画として活用され、今なお文通が求められ、継続されている秘訣だと考えられる。

手紙が、書き手のまとまりのある等身大の表現を可能とする「分身化」をもたらすとともに、思考と時間を伴うコミュニケーションを通して、「心の会話」を可能にすることは、事例による分析を通して確認でき、その仮説は正しいといえる。

なお、今回の検証からは、2つの発展的な視点も見出すことができる。

まず、1つ目として、何よりも多忙化する現代の生活スタイルの中では、手軽さや効率化を重視する志向が強く、手紙の魅力が馴染みづらい状況にあると考えられる。しかしながら、ストレスの多い社会状況を考え合わせると、手紙の「カタルシス」の生みやすさや、善意に基づく「心の会話」が行いやすいことなど、利用価値は小さくない。ただ、今まで現代に合った手紙の利用スタイルへの社会からの理解が不足しているといえる。

このように考えると、手紙文化を復活させ、現代に合った利用スタイルを提案する必要がある。つまり、手紙の魅力を活かすコミュニケーションのあり方と、日常化しているネットでのコミュニケーションのあり方とを、いかに共存させ棲み分けしていくかがカギになると考えられる。その理解を広げていく上で、たとえば、日常的な身近なコミュニケーションにはネットを活用しながら、記念日など相手や自分にとって特別な機会として残しておく必要がある場合には、積極的に手紙を利用することを推奨するように、改めて手紙の存在価値の大きさを社会に広げていくことが必要である。そして、そのような棲み分けに対する社会的なコンセンサスが得られれば、手紙文化はこれからも継承されていくと考えられる。

もう1つは、手紙はコミュニケーション力を鍛え、磨く手段にもなる。つまり、武道と同様に「手紙道」を明確に位置づけていくことで、時代を超えて社会全体にとって、コミュニケーションの技と精神を鍛える意識を高めることにつながると考えている。このように、ネット社会を背景として捉えたとき、手紙のもつ現代的な意味を「手紙道」という方向に位置づけることで、手紙の持つ価値がより際立ってくると考えられる。

手紙は、ネット社会に応じた活用スタイルを明確にすることによって、そのコミュニケーション価値は、社会から広く再評価されていくと考えている。

6. 今後への課題

今回の研究は、いくつかの課題を残している。それを以下に列挙し、この論文をひとまず終えたい。

①「手書き」のコミュニケーション価値のさらなる追究を行う。今回の取材では、手書きの形式やテーマが変わっても、「手書き」つまりアナログの魅力が語られる点は共通していた。人間が古代から関わってきた「手書き」の価値について、さらに踏み込む必要があると考えている。

②女性偏重の手紙利用の背景を探る。なぜ手紙の女性利用者が、男性に比べ圧倒的に多いのか。コミュニケーション・スタイルの性差の有無や、男性を遠ざける社会的な要因など、分かるような分からない点を、より明らかにする必要があると考えている。

③ネット時代に、手紙の価値をいかにPRするか。現在の手紙利用の状況を見ていると、一部のユーザーの間で、手紙への評価が留まっている印象がある。つまり、よほどの機会がないと、新たなユーザーに広がることが期待できない。これからの手紙教育のあり方も含めて、PRを検討する必要があると考えている。

④コミュニケーションの基礎力と手紙はどうつながるのか。時代とともにメディアが多様化してくる一方、コミュニケーションの基礎は不易な部分が多い。対面による会話や、手紙のやり取りは歴史も古く、多様なメディアのルーツでもあると考えられる。手紙により獲得できる精神や技が、コミュニケーションの基礎力にどう反映されるのかを、さらに深めていく必要があると考えている。

以上のような課題も明らかにしていくことで、時代を超えて、手紙のコミュニケーション価値は、より明らかなものになると確信している。

参考文献

- (書籍)
- 小松茂美『手紙の歴史』岩波新書、1976
- 小林正義『みんなの郵便文化史』にじゅうに、2002
- 久保田沙耶『漂流郵便局』小学館、2015
- 楠本智郎『赤崎水曜日郵便局』KADOKAWA、2016
- 宮田穰『昭和30年代に学ぶコミュニケーション』彩流社、2016
- 大江ひろ子『手紙アナトミア』DTP出版、2008
- サイモン・ガーフィールド、杉田七重訳『手紙 その消えゆく世界をたどる旅』柏書房、2015

高橋安光『手紙の時代』法政大学出版局、1995
白井雅観『絵手紙を創った男 小池邦夫』あすか書
房、1998
(その他)
密着Document「漂流郵便局」読売新聞・夕刊
2018/05/28～06/13
文通村会員誌「ふみびと」2017/08～2018/11
「若い女性に人気「文通」の新しいカタチ」
YOMIURI ONLINE, 2017/03/15
青少年ペンフレンドクラブニュース「Letter Park」
7月号(2018)
「若い女性の間で「文通」がブーム!? 青少年ペンフ
レンドクラブが1年半で2000人会員増のなぜ」
日刊SPA!, 2017/09/06
月刊「絵手紙」2018年8月号、日本絵手紙協会

※上記以外では、水曜日郵便局、漂流郵便局、文通
村、日本郵便、日本絵手紙協会への取材、およびウ
ェブサイトに基づいている。なお、この研究取材は、
相模女子大学による2018特定研究助成費を活用して
行われた。